

酒屋の看板

天野武

一 はしがき

老舗といわれる造り酒屋の軒下（屋根底下）などに、杉葉で作られた球形のものが吊り下げられているのを、現在でも全国各地で時折り見かける（写真 1・2・3・4・5・6）。これら杉球を吊り下げる慣わしは、これまでの伝統を継承するものの、酒屋をあらわす文字看板以前の形態を物語るものとして注目をひく。

この造り酒屋の杉球については、従来、看板の変遷ないし発達という視点から関心がはらわれ、またそれが屏風・図巻などに描写されていることから、絵画資料として着目されてきた。⁽²⁾これに対して、伝承を重視する民俗学的立場からはほとんど調査・研究がなされず、今日に至っている。こうした認識からすると、桂井和雄の資料提示⁽³⁾や最上孝敬の考察は、⁽⁴⁾特筆されてよいことである。

本稿は、この杉球に関する伝承資料が十分に蓄積されていない現状をふまえながらも、手持ちの資料を提示し、これまで説述されることになかった側面にも焦点を当てつつ、若干の考察を試みようとするも

のである。すなわち、近代化（科学化・機械化）以前の小規模経営による酒造りの実際では、売って利益をあげるためだったとはいえ、いわゆる手づくりの用具を使い、手作業を重ねて美酒を醸造しようと心掛けてきただけに、酒が無事できあがった際よろこびは尋常のものではなかったことは確かで、何かの形でその心意気を表現したのではあるまいか。それゆえに、軒下に吊り下げた杉球は、それ自体は有形のものだが、それに秘められた意識には、現在に生きるわれわれの考え以上のものがあつたのではなからうか。

以下、適宜先学の明示した資料と所説とを参考としながら、杉球の呼称、形状、吊り下げる時期および関係の儀礼を通して、それをめぐる習俗の諸相を追ってみたい。

二 看板の呼称

まず、酒屋の軒下に吊り下げられた杉球の呼称を挙げてみる。現在、これをサカバヤシ（酒林）と呼ぶのが一般的であるものの、必ずしもそうでないこと、およびそれらが呼称の変化した結果でないこと

などと言ひ切れるだろう。呼称の語る内容分析は後述することとし、
具体的な呼称の例示を確認地を付して掲げると、ほぼ次の一四例にな
る。便宜上、北から南の順に挙げてみよう。

- (1) サカボケ 岩手県稗貫郡石鳥谷町
- (2) サカボウケ 岩手県稗貫郡石鳥谷町
- (3) サカスギボケ 岩手県稗貫郡石鳥谷町・大迫町⁽⁵⁾
- (4) サカバタ 秋田県仙北郡六郷町
- (5) スギダマ 岩手県稗貫郡大迫町・秋田県平鹿郡雄物川町・同
湯沢市・福島県会津若松市・茨城県石岡市・栃木県今市市・石川県七
尾市・同能美郡辰口町・同加賀市動橋町・同加賀市八日市町・同江沼
郡山中町・福井県南条郡今庄町・岐阜県高山市・同吉城郡古川町・奈
良県橿原市・同山辺郡都祁村^{つが}・香川県観音寺市・佐賀県佐賀市・同多
久市
- (6) サカバヤシ 福島県会津若松市・石川県金沢市・同石川郡鶴
来町^{つら}・同加賀市動橋町・同加賀市八日市町・福井県武生市^{たけふ}・山梨県南
巨摩郡増穂町^{こま}・長野県松本市・京都府京都市伏見区・兵庫県神戸市灘
区・奈良県奈良市・香川県仲多度郡琴平町
- (7) スギバヤシ 石川県小松市粟津
- (8) スギカゴ 石川県七尾市
- (9) スギマル 岩手県稗貫郡大迫町・大阪府堺市・福岡県粕屋郡
宇美町
- (10) ホテ 高知県高知市・同中村市・同須崎市・同高岡郡大野見
村・同高岡郡窪川町⁽⁶⁾

- (11) ボテ 福岡県福岡市協多区
- (12) サケホテ 高知県高岡郡佐川町
- (13) サカボテ 福岡県福岡市博多区
- (14) スギボテ 福岡県粕屋郡宇美町

民間に伝承されている呼称十四は、以上の通りである。サカバヤシ
の他に、サカバタ・サカボウキの呼称は、すでに辞典などに収録され
ているから、⁽⁷⁾民間の呼称は、一般に周知されているそれより、より多
いことになる。長い時間の経過に伴う慣用と、そのものについての意
義が忘却された結果かと思われるものの、辞典類に収められていない
呼称が通用してきたこと自体は、見過ごしにできない点である。

さて、なぜ杉球類の呼称を問題にするかといえ、それに人々の直
截的な意識ないし受け止め方が投影されてきたと考えられるからであ
る。例えば、サカバヤシには、酒林・帘・酒杯の文字が当てられ、そ
の語源を、「酒屋の看板をいうボウシ(望子)の訛」と説く見解が有
力である。⁽⁸⁾これに対して、サカバタには酒旗、サカボウキには酒箒の
字が当てられているに過ぎない。よって、当然のこととはいえ、杉球
類の呼称は、形状に由るものが支配的であり、他に史(資)料を援用
するまでもなく、球形のものに収斂されてくるまでに種々の形状のも
のがあったことが推測できる。具体的呼称とその分布地を手掛りに、
若干の考察を試みてみよう。

第一点は、一四種類の呼称はいつつかの類型に整理できるものの、
うち一二例は酒か杉の付く呼称であること。わずかにホテとボテの二
つが例外である。酒と杉との密接な関係を物語っているように思われ



図1 『増補行程記』石鳥谷の分

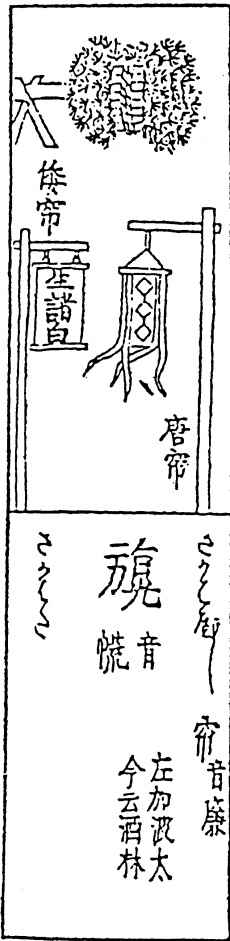


図2 『和漢三才図会』
所収のサカバヤシ

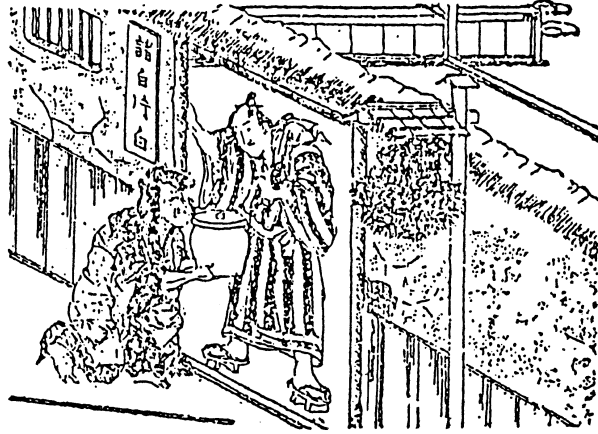


図3 『工商技芸看板考』
所収の酒屋の看板

図4 山本千代喜『酒の書物』(昭和15年)

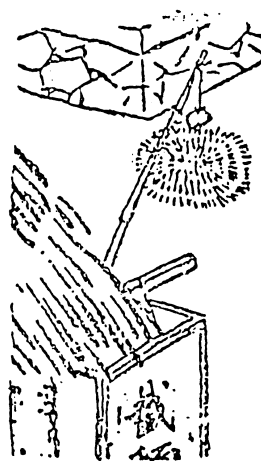


第百五十図
和漢三才図会

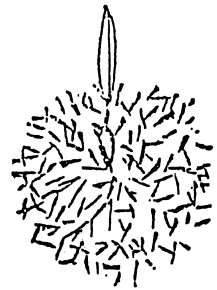


第百四十七図 本朝酔菩提
(文化五年 一八〇八)

球形の杉葉



第百四十八図 絵本太閤記
(寛政九年 一七九七)



第百四十九図守貞漫稿
(寛永二年)



写真1 秋田県平鹿郡大森町所見
(昭和60年)



写真2 長野県松本市所見 (昭和58年)

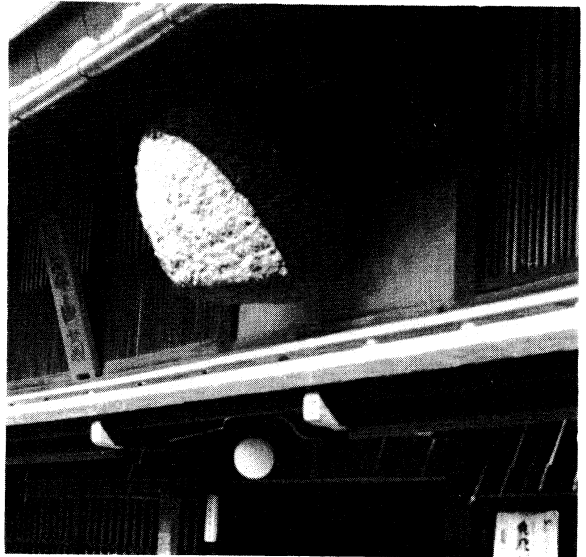


写真3 岐阜県高山市所見
(昭和55年)



写真4 岐阜県吉城郡古川町所見（昭和60年）

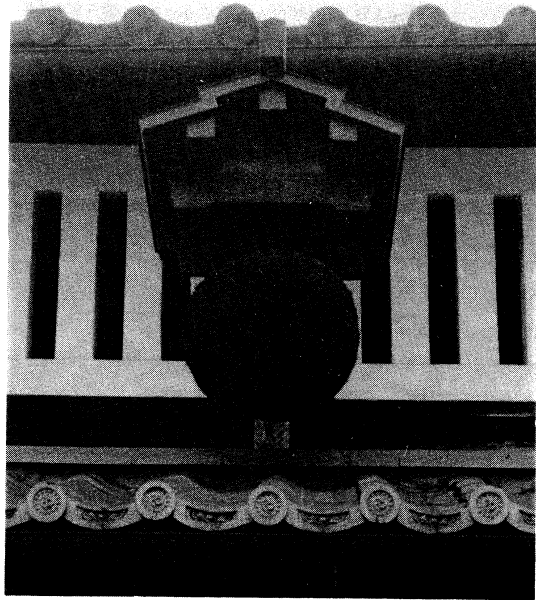


写真5 京都市伏見区所見（昭和61年）

写真6 福岡県福岡市所見（昭和54年）

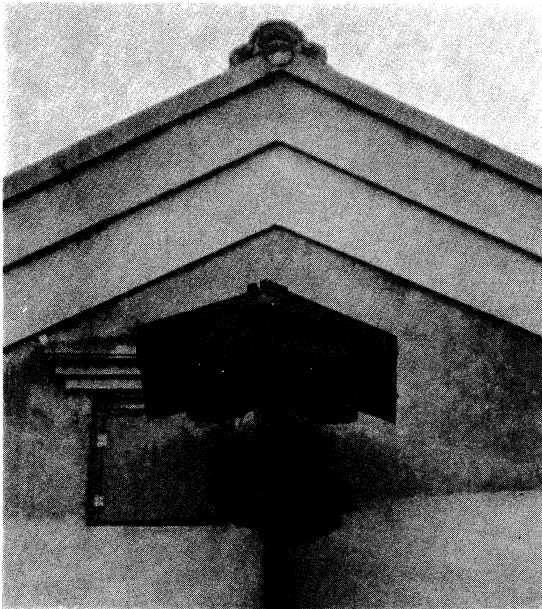




写真7 酒屋の看板(表)
新潟県関川村所見



写真8 酒屋の看板(裏)
新潟県関川村所見



写真9 鼓形のサカバヤシ
京都市伏見区所見
(昭和59年)

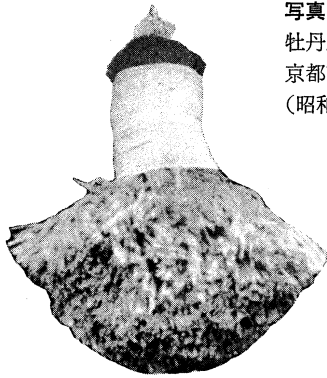


写真10
牡丹刷毛形のサカバヤシ
京都市伏見区所見
(昭和59年)

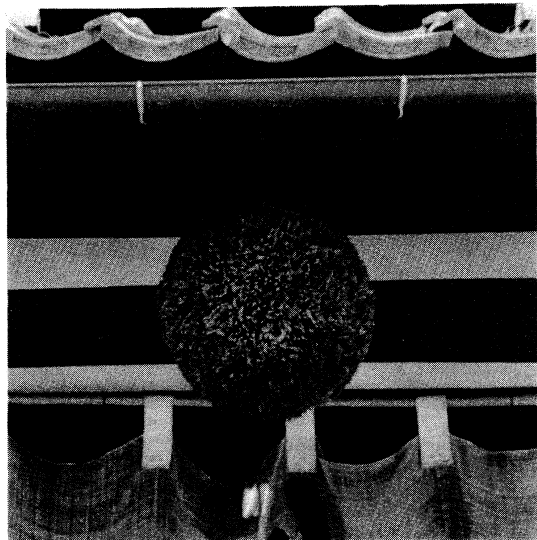
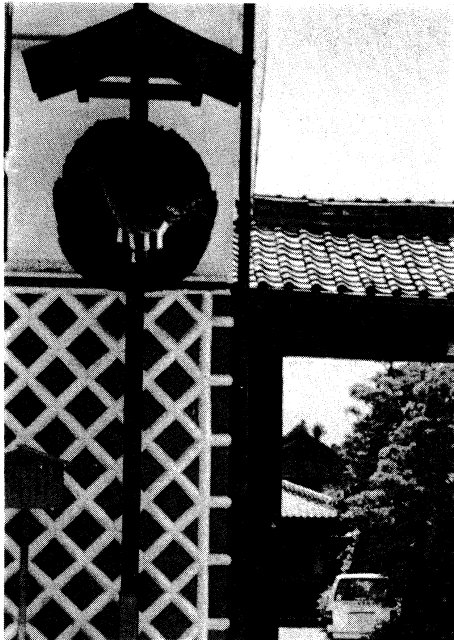


写真11 福島県会津若松市所見
(昭和59年)

写真12 山梨県増穂町所見 (昭和59年)



る。

第二点は、調査地に偏りのあることは否められないものの、スギダマ(杉玉)とサカバヤシ(酒林)の呼称が多く、地点で分布し、かつその二つの呼称が同一地点で重複して伝承されている場合が少なくないこと。一方が素材と形状に着眼した具象的呼称とするならば、他方は造り酒屋を意味する抽象的それと解される。

第三点は、スギダマ・サカバヤシの呼称が南北に長い日本の中央部に顕著に分布していると推定され、これに対して、東北日本では同一類型のものと考えられるサカボケ・サカスギボケ・サカボウケの呼称が、西南日本の四国・九州地方にはこれまた類型を同じくするホテ・ボテ・サケボテ・サカボテの呼称が各分布していること。サカボケとサカボテは、一見して由来ないし発想を著しく異にする呼称のようにみられる。この点、サカボウキの呼称が酒箒に由来するとの根拠の一つに、清水秀詮『増補行程記』(寛延四年、一七五一)収載の「石鳥谷」(現岩手県稗貫郡石鳥谷町)の分に、「酒店箒有」の記載とともに、往來に面して築かれた大木柱に取り付けられた小庇に杉球が吊り下げられている絵図が挙げられる(図1)。また、サカボテについては、「酒甫手」の字を充てている例があり、二階建の造り酒屋の軒下に小庇を付設し、そこから杉球が吊り下げられている一資料に接している⁽¹¹⁾。

なお、ホテ・ボテ・サケボテ・サカボテ・スギボテの呼称が同系列のものと解するならば、十七世紀初頭の慶長八年(一六〇三)に長崎で刊行された『日葡辞書』に、Sacabayaxi(サカバヤシ)・Tamabauagi

(タマバウキ)の語とともに、それと同じものを「⁽¹²⁾Ximo)ではFote(ほて)と言う。」と記述されている点は驚嘆に値する。なぜなら、今日、四国・九州地方に聴取される杉球の呼称と、この辞書に、下と掲載されている西国でホテ(ほて)と記されているものの呼び方がほぼ一致しているからである。

以上、造り酒屋の軒下に吊り下げられている杉球の呼称につきふれた。それらは地域的に差があり、同時代的に並称されてきたことを知る。また、その呼称は時間の経過に伴って若干の変化をきたすものの、基本的には継承性が濃いと判断されることである。だから、原初の形状が後に変化しても呼称が変らないことがあり、呼称と形状とが一致しない事態が発生したとも解されるのである。

三 看板の形状

文字看板が支配的である現在、新潟県岩船郡関川村所見の木製看板でさえ古風に見える(写真7・8)。物産の交易が盛んになり、文字に親しむ人々が多くなるにつれて、意思伝達の機能を持つ文字が看板に登場するようになるのは必至といえよう。こうした観点から前段で種々に呼ばれた杉球類は、もちろん文字看板以前のものであり、一種の看板といえる。とはいえ、文字を使用しない看板であっても、それが造り酒屋の標識であることが以心伝心でわかるものでなくてはならないはずである。この点、文字看板以前のものを実物看板・判じものなど五種類に分けた上で、造り酒屋の吊り下げの杉球は、商う品、つまりは酒に関係あるものと受け取られている⁽¹³⁾。しかし、こうした理解

の仕方にしても、なお抽象的域を出ていないように考えられるし、なぜ形状がそうなるかについては、すっきりしないことは否めない。そこで、商う品に関係あるものとする¹³こと、造り酒屋の看板が発生のときから必ずしも球形でなかったのではないか、すなわち形状に変化があったということの二点につき説いてみたい。

第一点の杉球類が商う品・酒に関係深いことにつき述べると、より厳密には、酒は杉材および杉葉と密接な関係にあったと置き換えるべきだ¹⁴と思う。

杉材が酒造りに関係のあったことは、近代化以前の桶・樽を利用した実態に即せば、疑う余地はない。例えば、酒造り用の水を運ぶ担い桶・水樽、米研ぎ用の手桶・踏研ぎ桶、浸し桶、半切り桶、暖気樽、本仕込み用の親桶、槽掛け用のこみ桶、夏用い用の大桶、出荷用の大小様々な樽などは全て杉材で作られている。それに、仕込み・酩突き¹⁴・酩摺り用の一連の樽棒にも杉材が当てられているのである。

このように、酒造りには、種々の桶・樽類が必要不可欠であったので、それらのタガの締め直しのために、あるいは新たに製作するために、桶屋職人が造り酒屋に長期滞在のかたちで出職することも少なくなかったほどである。

杉葉も酒造りに実際に利用されたことは、各地で聴かれることである。例えば、踏み研ぎ桶や半切り桶などのタガがゆるんで水漏れをきたすと、その箇所へ杉葉を差し込み、防ぐ。また、桶・樽に差し込んだ呑口類のふちから漏れることがあると同様に処置する。さらには、槽掛けして搾る際に酒袋にほころびがあつて漏れると、そこへ杉葉を

差し込んで漏れを防いだ。

こうした対応は、杉葉をとっさの場合の思い付きで使っているように受け取られやすい。しかし、このようにさせる選択の根底には、杉葉が清浄なものであるとの意識が作用していることは確かで、この点は見過ごせない。

第二点の杉球についての形状の変化ないしは古くは必ずしも球形でなかったと推定されることにつき述べてみよう。すでに引用した『日葡辞書』では、サカバヤシ(酒林)につき、「居酒屋の門口に取りつけるもので、木の枝を束ねて箒状に作ったもの」と解説しており、寺島良安の『和漢三才図会』(正徳二一八二一七二二)年の序が付されている¹⁵には、「近世倭所用望子多束杉葉為之、形如^レ鼓(後略)」と説明し図を載せている(写真¹⁶)などの資料にてらして、推定は支持されよう。

この点、酒屋の看板サカバヤシの形状変化につき、山本千代喜は、文献史料・絵画資料などを駆使して、竹棒の先に杉葉をつけた箒形から、杉葉の穂先きを前後に出して中程を縄で巻き、棒で差出したり棒で支えたりする鼓形へ、さらに杉葉を太く束ねて元を揃えて縄で巻いて吊り下げる牡丹刷毛形(筆の穂形)へ、それから現在見られるような球形へと変化したと説述する¹⁷。また、立部紀夫は、一六世紀以降に描かれた各種の「洛中洛外図」などの絵画資料を分析して、「豊国祭礼図」(豊国神社所蔵)に箒形をした緑色の酒林が認められ、これが酒林をとらえた現存最古の絵画資料と位置づけ、酒林の形態は、大まかに箒形・鼓形・牡丹刷毛形・球形の順に変化したと結論付けてい

(19)

文献史料や絵画資料を援用した見解は、もちろん説得力がある。こうした見方に加えて、坪井正五郎が集成した全国各地の事例⁽²⁰⁾、会津若松市・七尾市の伝承資料(後掲)などを総合して判断するとき、造り酒屋の看板とされる杉球の形状は、確かに変化をたどり現在に至っていることがわかる。なお、京都市伏見区のある酒造家では、現在(昭和五十九年)、球形でなく、鼓形・牡丹刷毛形のサカバヤシを吊り下げている例が見られる(写真9・10)。実物資料が実際に見られるということでは大変に珍しい。

以上、造り酒屋の看板サカバヤシ(以下、特別の場合を除きこの語を使用)につき、商う品に関係深い杉材(葉)を用いながらも、その形状は変化をたどりながら現在にいたったことを述べた。こうした立場からは、サカバヤシを門前に表わすようになったのは、杉材を用いた桶・樽類が酒造りに主流を占めるようになってからのことであり、それ以前にはさかのぼり得ないという論拠を肯定することになる。すなわち、杉材の大桶が従来の壺仕込みに代って登場するようになるのは近世初期以降のことといわれているから、酒造りの革命とでもいべき時期に、サカバヤシが表われたと解されるのである。

四 看板をめぐる習俗

造り酒屋の看板ないし象徴と目されるサカバヤシが近世初期ごろに登場したとの立場を肯定すると否とに拘らず、その衝にあった者は、いかなる意識でそれに関与したかを知ることが重要である。なぜな

ら、その実態如何によっては、サカバヤシの性格付けに新たな解釈が可能になるし、またそれが近世初期以前にさかのぼるものとみなさなければならぬこともなるからである。

そこで、サカバヤシは毎年一回新酒ができた折に作りなおされたという伝承が古風であること、その古い形状が箒形であったことなどに留意しながら、とにかく現在聴取できる限りで具体例を挙げて、看板に秘められた意識をさぐる手掛りとしてみたい。ただし、関西地方およびその周辺の造り酒屋が、酒神を祀るという奈良県桜井市三輪山麓に鎮座する大神神社^{みか}に参詣し、神社で作ったサカバヤシを持ち帰る習俗があるものの、これについては今は触れない。

事例一。福島県会津若松市

この地方の一般的慣わしでは、造り酒屋の主人は、酒屋の守護神とあがめている松尾神社によく参詣する。その時期は、仕込みにはいるころ、イチバンシポリ(しぼり初め)、コシキダオシ(甗倒し)、カイゾウ(皆造)。酒造りの一連の作業がおわり、使った用具類を洗うこと)などの際である。従来、サカバヤシは、新酒のしぼり初めか甗倒しの日に吊るし直したという。

その日は、気温や作業の進捗状態によって若干の前後はあるものの、旧正月ごろとされた。製作するのに必要な杉葉の調達は、自分の持ち山など決まりの場所からで、毎年、主人と杜氏が連れだつて現場へ赴き、枝払いしたのを持ち帰った。

この杉葉を、葉先が表面にできるように、枝の方を麻紐でひっかけひっかけして球形に丸めて行く。その後でまわりを刈り込んで体裁よく

仕上げる。ただし、必ず丸くしなければならなかったわけではなく、短い枝付きの葉を左右たがい違いにして束ねるのみで吊り下げるという例もあって一様ではなかった。これを吊り下げる位置は、正面入口の軒下とされた。見聞の限りでは、前年から吊り下げていたのを必ずおろすことがなかったため、新しいのを吊り下げる際に、古いのが並んでいこともあった。それでも、順を追って脇に吊り下げるよう配慮した。サカバヤシが外気にさらされて保存がきかなくなると、古いものから順番に取り下げ、サイノカミ(塞の神)の日に焼いて処分するのがしきたりとされた。こうした慣わしは、一部の造り酒屋では、現在でも継承されている(写真11)。

サカバヤシを新たに吊り下げたことは、その色が緑々としていることで判断が付く。茶褐色に色あせたものと比較すれば、誰にでも見分けがついた。もちろん、人々は新酒のできたことを知ったというのである。

事例二。石川県七尾市

ここでも、新酒の初しぼりのあった日または甑倒しの日に、造り酒屋ではスギカゴ(杉玉)を、正面入口の軒下に吊り下げる慣わしがあった。初しぼりの時期は、クラ(酒造蔵)により相違があったものの、一二月二〇日前後から寒明けごろとされ、甑倒しもはやいところ二月で遅い場合は三月中とされたから、期日にかなりの幅のあったことは否められない。

スギカゴは、古くはカキモチ(餅をうすくきって乾燥させたもの)を吊したような格好のものだったといわれ、一尺前後の枝付きの杉葉

をたがい違いに何段にも編みあげて、吊り下げたと伝えられている。球形に作るようになってからは、目の粗い丸型の籠をカゴヤ(籠屋)に依頼してあつらえ、そこへ杉葉を一本一本指し込んで仕上げたという。手数をかけて球形にしたのを新風としているわけである。もちろん、毎年作って、それを吊り下げる点では違いはなかった。

ここで留意すべきは、スギカゴの素材となる杉葉は、主人または杜氏が持ち山から迎えてくるものではなく、造り酒屋から肥料を運んで田畑に利用している者、あるいは年季奉公人として住み込んでいる者などから、その時期を迎えるころに届けられるのを使ったと伝えられている点である。決まりの場所から調達されたものでなかったのである。

事例三。山梨県南巨摩郡増穂町青柳

造り酒屋では、毎年一回、サカバヤシを吊り下げるのが慣わしであったと伝えられるものの、現在は必ずしも厳守されていない。このため、往時は仕込みがはじまる一二月末から一二月初めごろに、酒屋の主人または杜氏が杉山へ赴き、杉葉を集めて持ち帰る。

それを水につけて保存しておき、新酒の初しぼりがなされる時期を見計ってサカバヤシを作り、門前入口の脇に設けられた小庇から吊り下げるとしている。初しぼりは、カンヅクリと呼ばれる通り、寒明けのころであるから、サカバヤシを吊り下げるのは、旧正月初旬というところになる。ただし、現在吊り下げられているものは、二年前に新たに作られたといい、それにシメナワが掛けられている(写真12)。シメナワを掛ける風は、必ずしも古くからの習俗ではないらしい。

事例四。高知県高岡郡佐川町

この造り酒屋では、仕込み用の米を洗う初日、コシキムスビと呼ばれる米を蒸す初日などに神官を招き、仕込み蔵に安置してある神棚の前で祝詞をあげてもらい、お祓いをうける。この習俗は、現在も続けられている。

これとは別に、例年、新酒しぼりがなされる時期になると、杉葉で作ったサカホテを酒屋の正面入口の軒下に吊るし代える慣例が遵守されてきた。一二月末から一月初旬のころだという。これを作り、吊るし代えるのは醸造部所属の棟梁大工であり、その者が杉葉を手配し、それを丸めて仕上げる。

この日、造り酒屋では、食膳に尾頭付きの焼き魚を供し、家族や杜氏をはじめとする酒造労働者が共食する慣わしである。新酒のできたことを祝ったのである。

なお、高知県下に見られたサケボテでは、全てが杉葉を丸く刈り込んで球形にしたものばかりでなく、中村市では、青竹の先端に一枚紙の熨斗をつけ店先に立てたものだ⁽²²⁾と伝えられ、それは、初しぼりの日だったという。

これら四地点におけるサカバヤシをめぐる習俗は、必ずしも全国的資料を網羅するものではない。しかし、断片的に聴取した岩手県石鳥谷町・茨城県石岡市・福井県武生市および福岡県宇美町などの伝承を参照するとき、ここに挙げた事例は、著しく偏向している例とはいえず、むしろあまり遠くない過去の、あるいは現在に連なる古い時代の一般的習俗を物語っているように解される。ちなみに、福井県武生市

のある造り酒屋の例では、仕込みが進んで初しぼりの日を迎えると、サカバヤシを正面玄関の軒下に吊り下げ、古いと掛けかえたと伝えられている。手先の器用な杜氏が杉葉を用いて作りあげたもので、時期的には年末から年始にかけてのころであった。ただし、厳格にやったのは昭和十年前後ごろまでで、その後は必ずしも毎年掛けかえるようなことはせず、破損が著しくなるとかえるにとどまっている。ここでは、もちろん各種の桶・樽類を使用して酒を造り、出荷してきたわけで、それらには杉材が用いられた。しかも、これら杉材にはヤニ（樹脂）があつて酒の防腐に一役買うのだと受けとめ、サカバヤシを吊りさげることを防腐除けになると信じられていることである。目下のことろ類例に乏しいとはいえ、注目に値する意識といえよう。

このように見てくると、地域や当事者の違いなどがあつて、サカバヤシをめぐる習俗ないし意識は、決して単純でないことがわかる。それでも、サカバヤシをめぐる具体的伝承を分析した限りにおいても、①・古くは必ずしも球形とは限らなかったこと、②・杉葉を利用することが一般的であつたこと、③・新酒ができたという意思伝達の機能を果たしてきたこと、④・後には造り酒屋の看板となつてきたこと、⑤・当事者間では何らかの区切りと考え吊り上げたこと、などは疑う余地がないように思われる。

五 若干の考察

文字看板以前の、酒屋の看板サカバヤシについての呼称・形状・習俗などの概要は、前段までに述べてきた通りである。それらを手掛か

りして、若干のことを民俗学的見地に立って述べてみたい。それは、サカバヤシを「日本の最も代表的なシンボル看板」であるとの立場をとり、その由来を中国の模倣でなく、また大和の大神神社の縁起によるものでもないとした上で、杉材と酒の出会いによって大量生産が可能になった転機に登場したとする⁽²³⁾。高桑末秀の説をふまえて、別の立場からサカバヤシの由来を考察しようとすることに他ならない。もっとも、その発生ないし由来の年代を不問としながらも、すでにサカバヤシが神の依り代ではなかったという推定が下されているのである⁽²⁵⁾。

私は、これらの所説に関連しながら、サカバヤシの古い形状が箒形など単純であったこと、毎年素材とする杉葉（枝）を迎えてきて初しぼりの日に吊り上げかえたこと、吊り上げる場所が正面入口の軒下などであったこと、などを考慮し、かつ類似ないし周辺の習俗などを比較しながら、若干の点につき思いつくまゝを記すことにする。

第一は、造り酒屋の看板といわれるサカバヤシを作り、それを吊り上げる以前に、新酒ができた折に酒の神を迎えて神人和楽の機会を持つという習俗があったのではないかということ。その際の神が降臨し、神が依り付く標識とされたのが先端に葉のついた樹木であり、青竹の類でなかったかと推定されるのである。なぜなら、酒は、本来神祭りに神へ供えるべきものとして、造られたものであるからだ⁽²⁶⁾。かく解する根拠として、人々は古くは日常生活において酒を口にするにはなかったものの、神祭りの日には神を迎えて共食共飲をしたと考えられることに加えて、後々造り酒屋で掲げられたサカバヤシが箒形ないしホテ形をしていたこと、それがサカバダと特称されていること、

および酒造りの作業工程のなかでも初しぼりの日、甑倒しの日という酒造りに一応の目安がついた重要な折り目に掲出される慣わしであったことなどの習俗が参考となろう。

第二は、こうした伝統が、造り酒屋が出現してからも造り酒屋に継承され、踏襲されていく過程で、先端に葉の付いた樹木や青竹の類に代って形状を発展させ、かつ掲出の仕方を前進させたのではなからうか。この点につき、正鶴をついたのが前述の高桑末秀の産業シンボル説と解されるのである。サカバヤシが出現したとされる年代の初期においては、それが箒形やホテ形をしていたことは、絵画資料などによって実証済みで疑う余地はない。

ここで箒形といい、ホテ形というのは、要するに棒状をしたものの先端部が丸められ、あたかも箒のような格好だったことを物語る。ちなみに、ホテとは「樹木や竹の先端に葉のついた枝を何本か束ねたものであったらしい」と推定され、事実、ホテ（ボテ、ブテともいう）と呼ばれる威嚇器具は、小枝の先端部が箒状に枝分れているのを丸めて結束したものである⁽²⁸⁾。

ただ、ここで特筆しておきたいのは、造り酒屋でサカバヤシが掲出される慣わしが定着するにおよんで、それが商う品、つまりここでは酒を売りさばこうとする意識を濃厚に露出したことである。少なくとも、箒形のサカバヤシには、明確な商魂を感じずにはおれないのである。なぜなら、箒はものをはき出す機能を持つ用具として人々に理解されてきたわけであるから、造り酒屋の意識をよく世間に訴え得たに違いないからである。端的にいえば、サカバヤシを吊り下げる習俗

は、広く伝承されてきた箒に関する俗信⁽²⁹⁾と同じ趣旨のものではなかったかと考えたい。

このように理解することが許されるならば、サカバヤシは杉葉を用いて作られることから、確かに商う品に関係する看板の一種と解されるものの、むしろ、その形状が意味するところに本来の趣旨がこめられていた看板というべきかも知れない。

第三は、サカバヤシが球形に収斂していったのは後々の変化であり、それに杉葉が使われたのは、まさに酒造りや出荷用の様々な桶類・樽類の素材が杉であったことに関係する。この点、杉葉を球形に丸めて看板とした創意工夫には、先人の間に培われてきた美意識さえ感ずる。一朝一夕で考案されたものでないことは確かなのである。

これを要するに、以上、三点の指摘を通して、サカバヤシには、それ以前にさかのぼる信仰的な由来があったこと、それが世間一般に定着した後においても信仰的要素を内包させながらも次第に経済的要素を強め、かつ洗練された形状へと進展したことなどを強調したかったのである。

六 結びにかえて

酒屋の看板だといわれるサカバヤシにつき、民俗学的調査研究が立ち遅れているが、何とか、かかる現状を打破したいと願っている。

この稿では、詳細な現地調査が実行できなかったものの、筆者は、酒神の依り代から、箒にまつわる俗信に着眼して巧みに看板を考案し、さらに美意識を投影させて球形へと発展させたという仮説を提示

してみた。今後ともに造り酒屋にまつわる具体的伝承資料を積み重ねつつ、文献史料・絵画資料などを参考としながら、問題の解明に努力したい。大方のご叱正ご教示が得られれば幸いである。

注

- (1) 山本千代喜『酒の書物』(龍星閣、昭和十五年)四四九ページ以下、遠藤武『図説広告変遷史』(中部日本新聞社、昭和三十六年)三〇ページ以下
- (2) 坪井正五郎『工商技芸看板考』(哲学書院、明治二〇年)八ページ以下、立部紀夫『酒林小考—絵画資料を中心とした史的考察—』(『民具マンスリー』一八ノ一二所収、昭和六一年)一ページ以下
- (3) 桂井和雄『南海民俗風情』(高知市観光協会、昭和二十九年)二四ページ
- (4) 最上孝敬『サカバヤシ』(『西郊民俗』一二所収、昭和三五年)一ページ以下
- (5) 村田柴太「さかさぎばけ」(『南部杜氏』六一所収、昭和五四年)、石鳥谷町史編纂委員会編『石鳥谷町史』上巻(石鳥谷町、昭和五四年)一二五二ページ、一二五四ページ、南部杜氏編纂委員会編『南部杜氏』(石鳥谷町、昭和五八年)七八ページ以下、四〇九ページ
- (6) 前掲、桂井和雄『南海民俗風情』二四ページ
- (7) 日本国語大辞典刊行会編『日本国語大辞典』八(小学館、昭和四九年)「さかばた」(六四一ページ)・「さかばやし」(六四二ページ)・「さかぼうき」(六四三ページ)・「さかばて」(同上)の項
- (8) 寺島良安『和漢三才図会』(享保一七年)東京美術版、四〇二ページ
- (9) 前掲『石鳥谷町史』上巻一二五二ページ
- (10) 広谷喜十郎『高知県酒造史』第一集(高知県酒造組合連合会、昭和五六年)三二二ページ、四一ページ、広谷喜十郎『酒甫手』(高知県歴史辞典)所収、昭和五五年)三〇〇ページ以下
- (11) 平尾道雄編『土佐その風土と史話』(高知県、昭和四八年)「酒・神とともにありき」の項
- (12) 土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』(岩波書店、昭和五

五年)五四五ページ、六〇七ページ、七六七ページ

- (13) 前掲、遠藤武『図説広告変遷史』三四ページ、同「かんばん(看板)」
『日本民俗事典』所収、昭和四七年)一八三ページ

- (14) 石鳥谷町教育委員会編『南部杜氏の酒造用具』(同上、昭和五七年)、
前掲『南部杜氏』二四三ページ以下、小原二郎『日本人と木の文化』

(朝日新聞社、昭和五九)一七〇ページ、足田輝一『樹の文化誌』(朝
日新聞社、昭和六〇年)二四六ページ以下

- (15) 前掲『邦訳日葡辞書』五四五ページ

- (16) 前掲『和漢三才図会』四〇二ページ

- (17) 前掲『酒の書物』四六三ページ以下

- (18) 前掲「酒林小考」四ページ

- (19) 前掲「酒林小考」一〇ページ

- (20) 前掲『工商技芸看板考』一一ページ

- (21) 例えば、竹内利美「さかや(酒屋)」(『日本社会民俗辞典』所収、昭
和二九年)四八六ページ以下

- (22) 前掲、『南海民俗風情』二四ページ

- (23) 高桑末秀『広告のルーツ』(日本評論社、昭和五六年)二五九ページ

- (24) 前掲『広告のルーツ』二九五ページ以下

- (25) 前掲最上孝敬「サカバヤシ」一ページ

- (26) 前掲「サカバヤシ」二ページ

- (27) 前掲「サカバヤシ」一ページ

- (28) 拙稿「医王山麓の野兔狩り」(『加能民俗研究』一三所収、昭和六〇
年)二二二ページ以下

- (29) 民俗学研究所編『民俗学辞典』(東京堂、昭和二六年)五二〇ページ、
大島建彦・御巫理花編『掃除の民俗』(三弥井書店、昭和五九年)五
ページ以下

付記。本稿は、昭和六〇年一〇月一九日、本会第三回公開講演会(東京都・
日本酒造会館)において口述後、さらに補筆したものである。

(あまの・たけし 文化庁文化財保護部)